

〔研究ノート〕

## 北総台地における沈線文土器群の出現

—— 木の根 I 式及びII式土器の提唱 ——

池 田 大 助

1. はじめに
2. 木の根遺跡とその周辺
3. 出土土器の検討
4. 木の根 I 式及びII式土器の設定と時間的展開
5. ま と め



第104図 縄文早期における主要遺跡 (1/1600000)

## 1. はじめに

北総台地、三里塚周辺に営なまれた縄文時代早期の遺跡群、その内のひとつ、木の根No.6遺跡(註1)から出土した土器は、その、質、量ともに、撚糸文系土器群初頭～終末にかけての状況を考える上で極めて重要な資料を我々に与えてくれた。最終的にその編集及び刊行の責を負ったものとして、改めて土器様相の再検討を何らかの形で行ないたいと考えてきた。幸い今回、研究部兼務となりその場を得て、願いがかなえられることとなった。しかし、筆者自身の日常の不勉強がたたり、公けにすべき内容が整っているかどうか、いささか心もとないが、とりあえず資料の提示をはじめとし、木の根遺跡を中心とする地域的な様相及び編年的位置の確認を目的として論を進めてゆきたいと思う。

## 2. 木の根遺跡とその周辺

昭和46年、成田空港の建設に伴ない、発掘調査された、三里塚遺跡群の報告において、すでに当地域が縄文時代早期遺跡の一大密集地であることが知られた。

第105図に示す通り木の根遺跡周辺は縄文時代早期を中心とする遺跡(註2)がとなり合って立地している。

中心となる縄文時代早期前半を中心として、その状況をIV期に分けてみよう。(第106図)

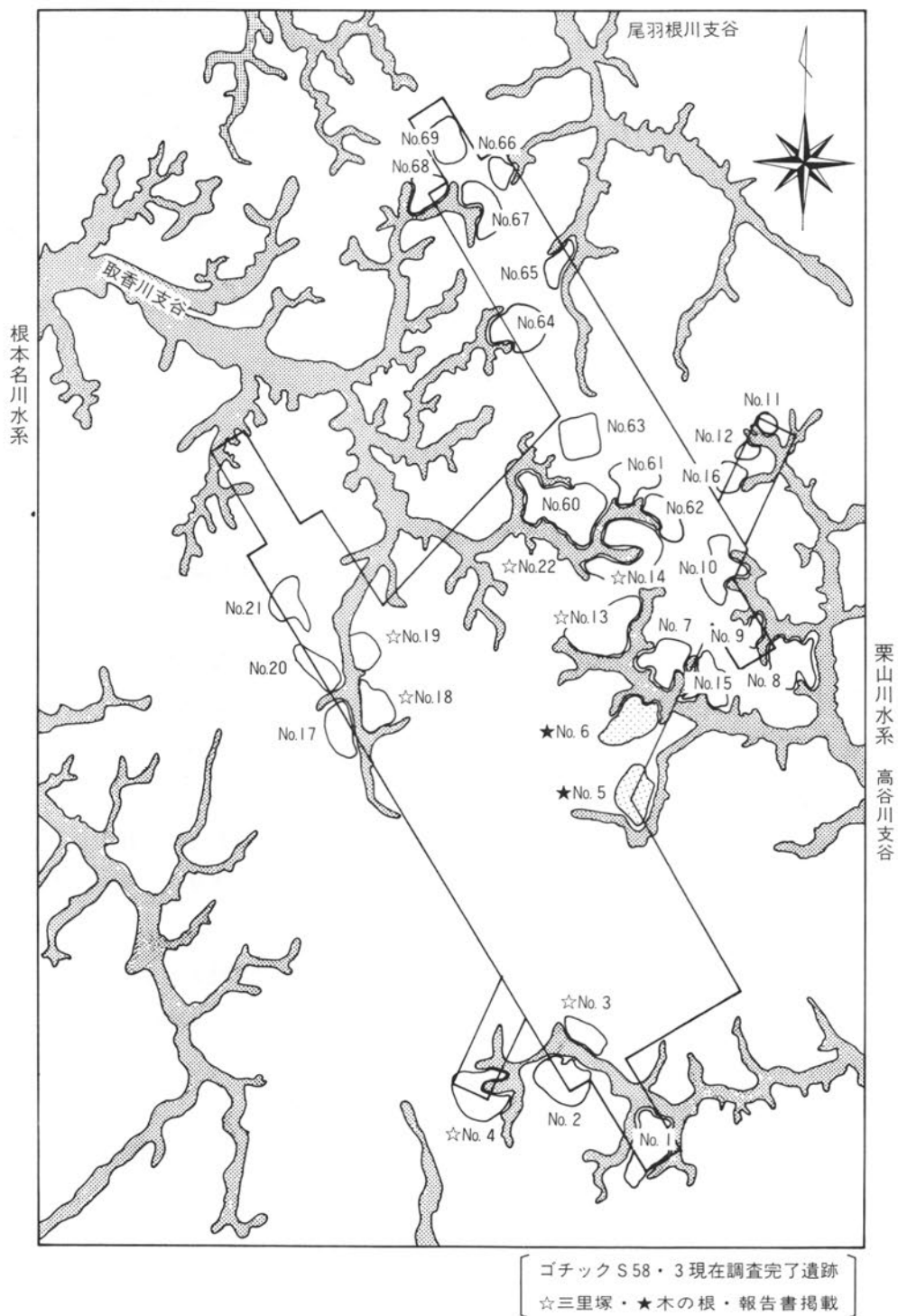
撚糸文期初頭、木の根第I期(井草期)に入ると根本名川水系と、栗山川水系の分水嶺によって遺跡がみられるようになる。調査あるいは分布調査により当期とされるものは7遺跡を数える。

木の根II期(夏島期)に入ると遺跡数は倍に近い11遺跡となる。I期と比べII期も台地の占有状況にはさほど大きな変化はみられない。旧来の生活拠点を引き続き活動の場として、その活発さを得ていると言えるだろう。

第III期(稻荷台期～花輪台期)においては木の根、及びNo.7の2遺跡のみになってしまう。他の遺跡においても多少、破片の出土がみられなくもないが、台地をある程度占有したもの、生活拠点として考え得るもの、という見方をするならば、この2遺跡のみとなる。しかも木の根遺跡に対してNo.7遺跡はその占有規模が半分以下でしかない。

第IV期(沈線文期)以後になると再び遺跡数の増大がみられる。現在、19遺跡が確認されている。三戸式土器を中心に出土する遺跡(△で示している)は、1遺跡のみである。あとは田戸下層式以後である。三戸式土器を出土するNo.67遺跡は、内容・質共に整っており、住居跡等の検出もみられたと言うことである。(S57年度調査、未報告)

第III期及び三戸期における遺跡数の減少と言う状況は現在までの調査成果の内の説明し得るような結果は得られていない。当然のことながら未調査部分との関連を含みつつではある。第



第105図 No. 6 遺跡周辺遺跡立地状況 (S = 1/250000)

106図は各期においてその遺跡の主体的に存在する時期をまとめたものである。整理の進展と共に変更される可能性もあるが、大まかな内容に関しては大きな変化はないと思う。

これらの遺跡は第II期及び第IV期においてはかなり積極的な活動—複数?以上の集団—が分水嶺及びその台地上で行なわれていたことを見る事が出来るだろう。ベースとなる遺跡の検討も可能となるかも知れない。第106図には図示し得ないが、取香川支谷、高谷川支谷の台地上においても第I・II・IV期に相当する時期の遺跡がかなりの数で確認されており活動の活発さを見ることが出来る。地元研究者によれば多古町～大栄町にかけて第II～IV期に相当するかなりの規模の遺跡が所在しているということである。特に大須賀川に面する台地上には稲荷台～三戸式土器を出土する遺跡が連続しているといわれる。栗山川系においても同様であると言われ、周辺地域を含めた面的な研究を進める上で注意しなければならないと思われる。

よく言われることであるが、夏島期以後、遺跡数の増大を含めて、積極的に「分布的展開(註3)をみせる」ものであるとするならば、本地域においてもかなり積極的な活動及び生活拠点の展開が行なわれていったと言えよう。

そして、縄文時代早期全体の流れの中でとらえるなら各々の遺跡は時間的にも空間的にも極めて継続的な広がりを持って存続していったと言える。

そのなかでこの木の根遺跡は木の根第III期を主体的時期とする遺跡として現在のところ唯一のものである。

時間的にも空間的にも、連続して維持されてきた生活拠点がこの時期、木の根遺跡、及びNo.7遺跡のみに限られてしまうことについて正直なところ説明できる論拠を現在持ち合せていない。ただ木の根遺跡出土遺物の再検討を行なうなかで、撚糸文期の後半～終末にかけて、まったくいままで知ることのなかった新しい変化—沈線文土器の発生を含む、縄文社会の内的な変化と対応しているという事実のみをいま提示しておこう。(註4)

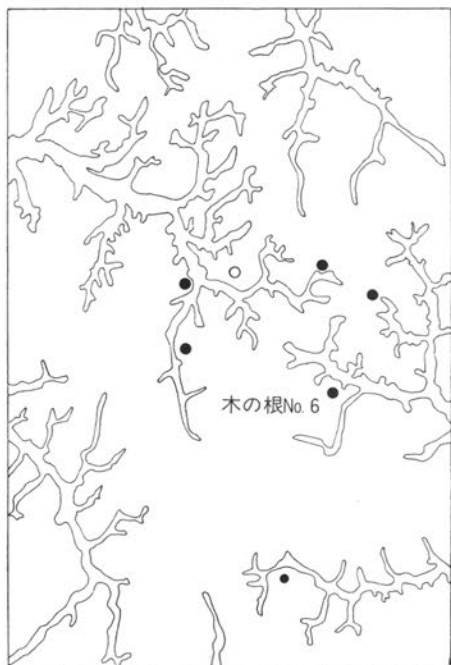
### 3. 出土土器の検討

木の根遺跡から出土した土器は縄文時代早期を中心とし、前期・中期までのものがみられ、そして報告書中において、第I群から第VII群までに分類されている。

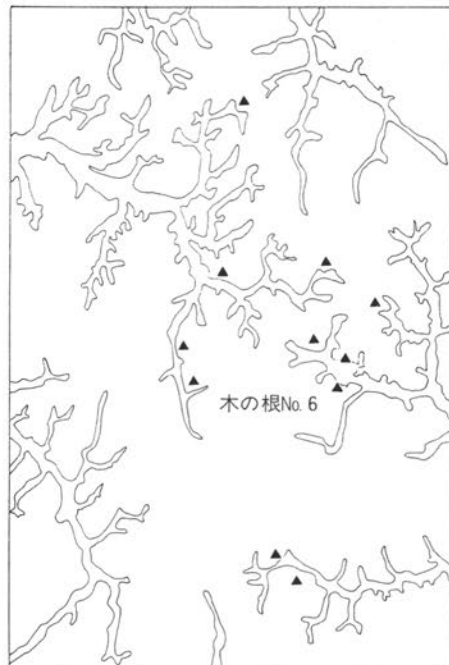
第I群土器は、撚糸文系の土器群を一括し、次の様に細分された。1類—井草式、2類—夏島式、3類—稲荷台式、4類—花輪台式、5類—撚糸文期終末に位置づけられるものである。この第I群だけで出土土器の約9割(約26,500点)を占めており本遺跡の最も中心となっている時期の所産である。

第II群は田戸系の土器群をまとめている。

第III群はいわゆる子母口、野島式土器といった縄文早期後半～終末期にかけての一群である。



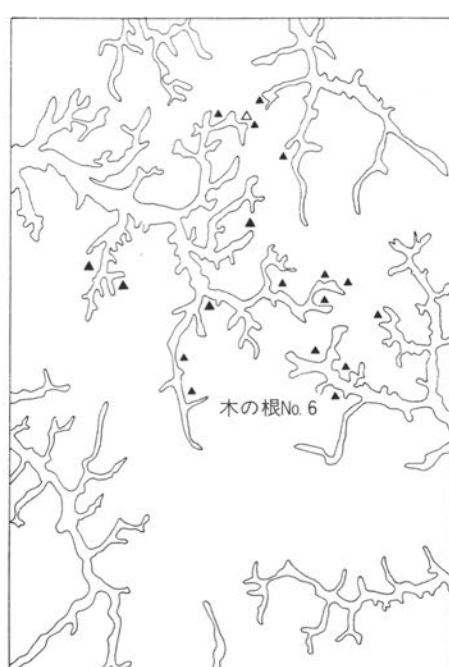
1. 木の根 I 期(井草) ○住居跡検出



2. 木の根 II 期(夏島)



3. 木の根 III 期



4. 木の根 IV 期(沈線文期以後)  
(△三戸期住居検出)

第106図 木の根周辺遺跡占有状況

これらは撚糸文系土器群と並び注目に値すべきものがある。本遺跡出土の子母口式土器について安孫子昭二氏の論文中（東京考古1982）において、子母口式の新しい段階、すなわち野島式への移行期に位置する一群のものとして、東海系の清水柳E式と対比され、木の根A式（仮称）として縄文時代早期後半の1段階として位置づけられたものである。

第IV群は前期初頭の一群、第V群は浮島、興津式といった前期後半のもの、第VI群は前期末～中期初頭にかけてのもの、第VII群はそれ以後、あるいは時期不明のものが取り扱われる。

第I群及び第III群以外は、数量的にも内容的にもその存在が示される点以外、極めて貧弱なものであり、特筆されるべきものはみられない。

以下、木の根遺跡において、縄文早期前半を特徴づける、第I群3b類及び4・5類土器を中心に撚糸文系土器群の変遷をみてみよう。

（なお拓影図、実測図等は新たに作り直したものである。）

#### (1)木の根第I群3b類土器（第107図～109図）

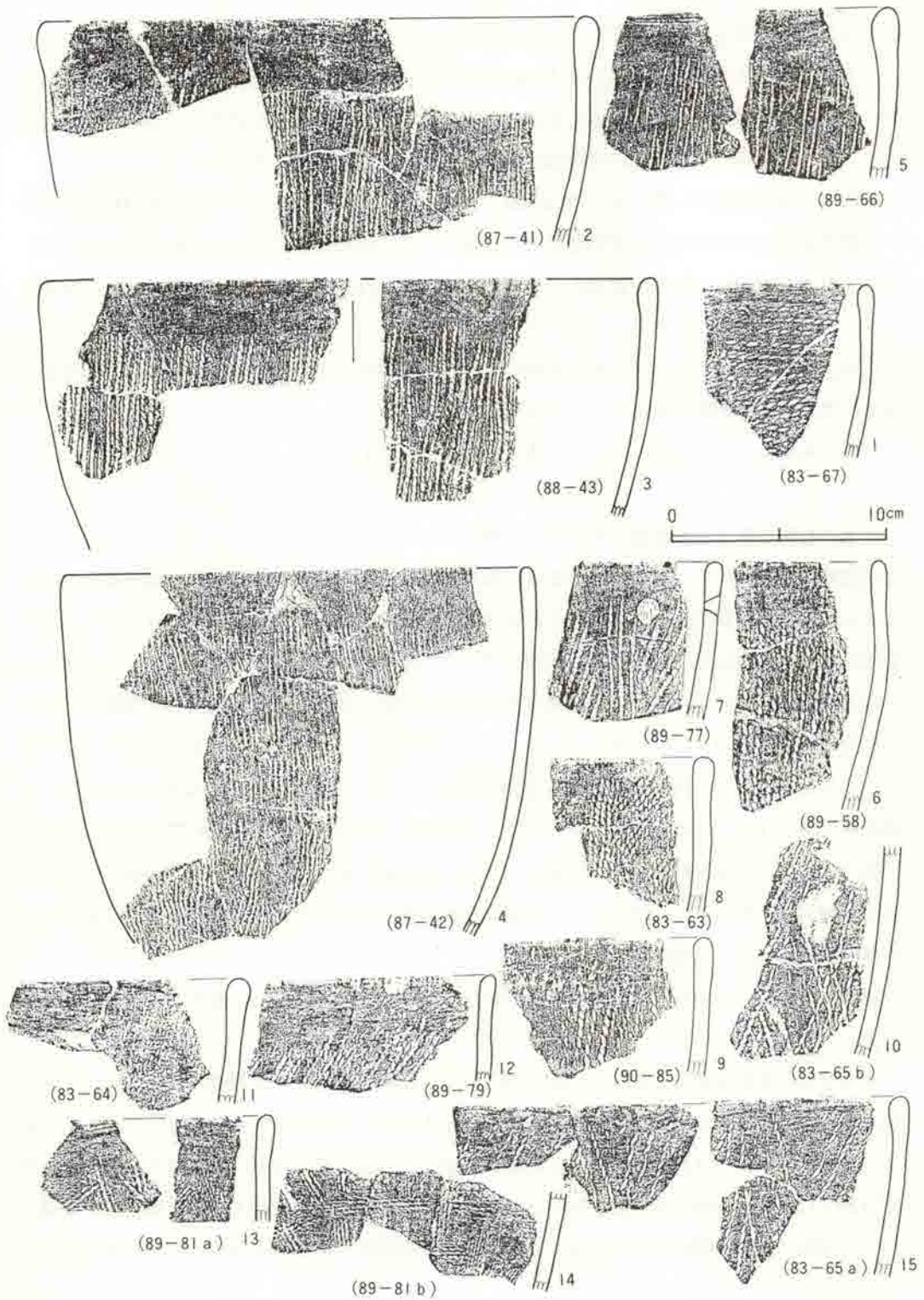
本遺跡を特徴づけた一群の土器である。系統的には2類及び3a類（稻荷台式土器）の流れにあり、撚糸及び縄文の施文されたものは3a類と施文・胎土・焼成の点からはほとんどその変化を捉え切れない部分も多く、報告書では、3a類と3b類土器の分離については、次のような、説明を行なっている。「口縁部無文帯は口唇部研磨の延長であるか無文帯を意識したものか、判別し難いものもあり、便宜的にここでは、通常品については幅1cmを目安として」区別しているが、これは「1cm」の幅として限るのではなくて、口唇部整形及びより一歩進んだ「口縁部無文帯」（註5）の出現・成立をもって、その分離と特色を主張し得るのではないかと思う。

第2点として、3a類に比べ、口縁部がより「直立的」になると言うことである。いいかえれば口縁部無文帯出現・の成形により口縁部の直立化が行なわれ、口縁部無文帯の下位より、各種の施文が施される様になる。

第3点として、最も注目すべき点であるが、文様の多様化と言うべき変化がみられてくるのである。

まずY型（撚糸施文）であるが（第107図）従来の縦位を主流とした撚糸の施文方法に変化が見ることが出来る。口縁部無文帯は共通の変化であることは言うまでもないことであるが、縦位（1・2）斜位（4）の他に（3）のように縦位+斜位の組み合わせ（7・9・11）縦位+横位（10・12・15）斜格子状（13・14）と前段階からの系統にあるものとは考え切れない多様化がこの段階において開始されている。（7～15）までの施文であるが3条ないしは5条と基本とするものがよくみられる。

J型（縄文施文）（第108図）においては、その変化は施文方向の多様化という変化が指摘で



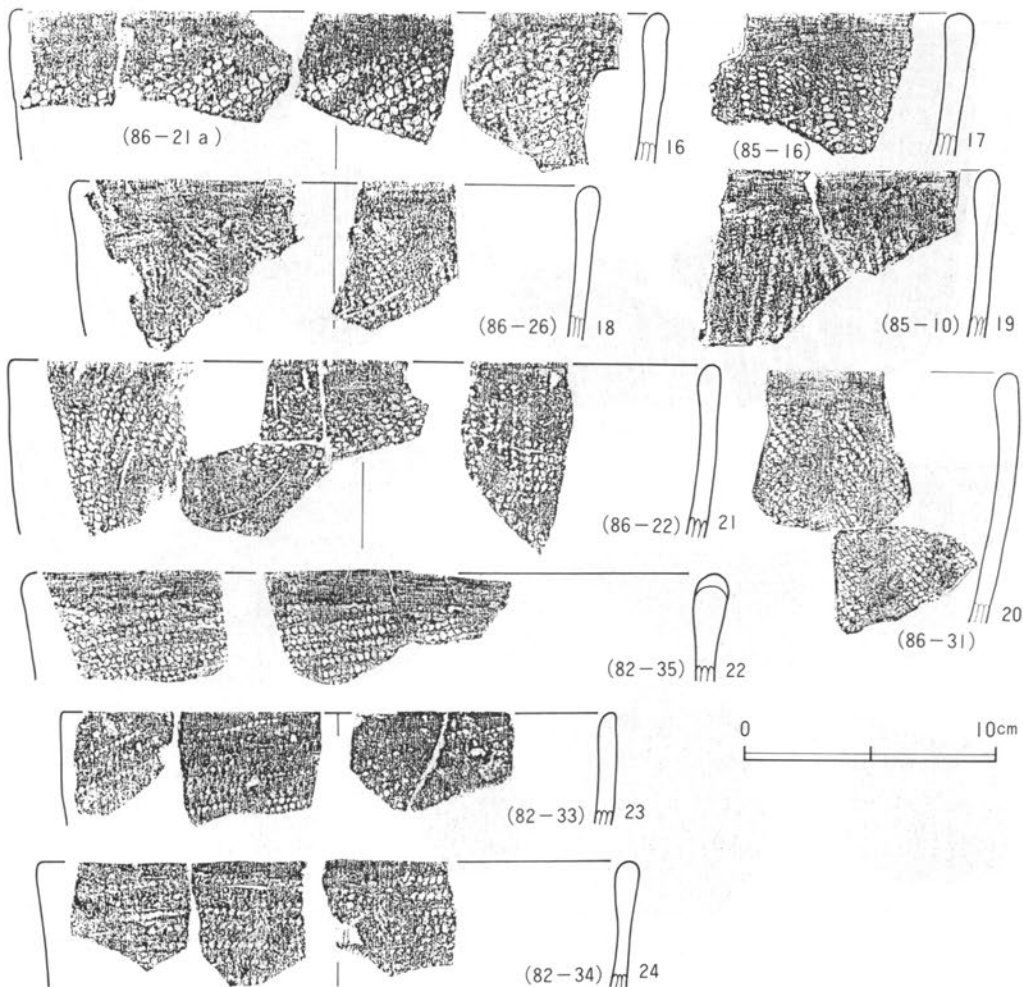
第107図 木の根I式(3b類Y型)

きよう。横位 (16) 縦位 (17・18・19・20) 斜方 (22-24) 多方向 (21) への回転である。Y型と同様にやはり口縁部の無文帯が形成されつつあると言えよう。3 a類では7:3とJ型優位であったものが3 b類では3:7とY型優位となる点も注目すべき点であろう。(註6)

そして従来、明確に分離されていたであろうと考えられる、J型とY型との区分が取りはらわれ、新しい状況が創出されてゆく。第109図に示したものがそれである。

旧来の伝統的な施文方法が、一気に解放されたかの様に施される。縄文+撚糸、そして縄文+沈線文 (25)、撚糸文と地文として縦位の沈線を施す (26・33) といったものまで見る事が出来るようになる。

それはこの3 b類土器自身の発展過程のなかに沈線文による初期的な施文が開始されたものであると言える。いままで何人もの人々により述べられてきた「撚糸文系土器の簡略化」(註7)

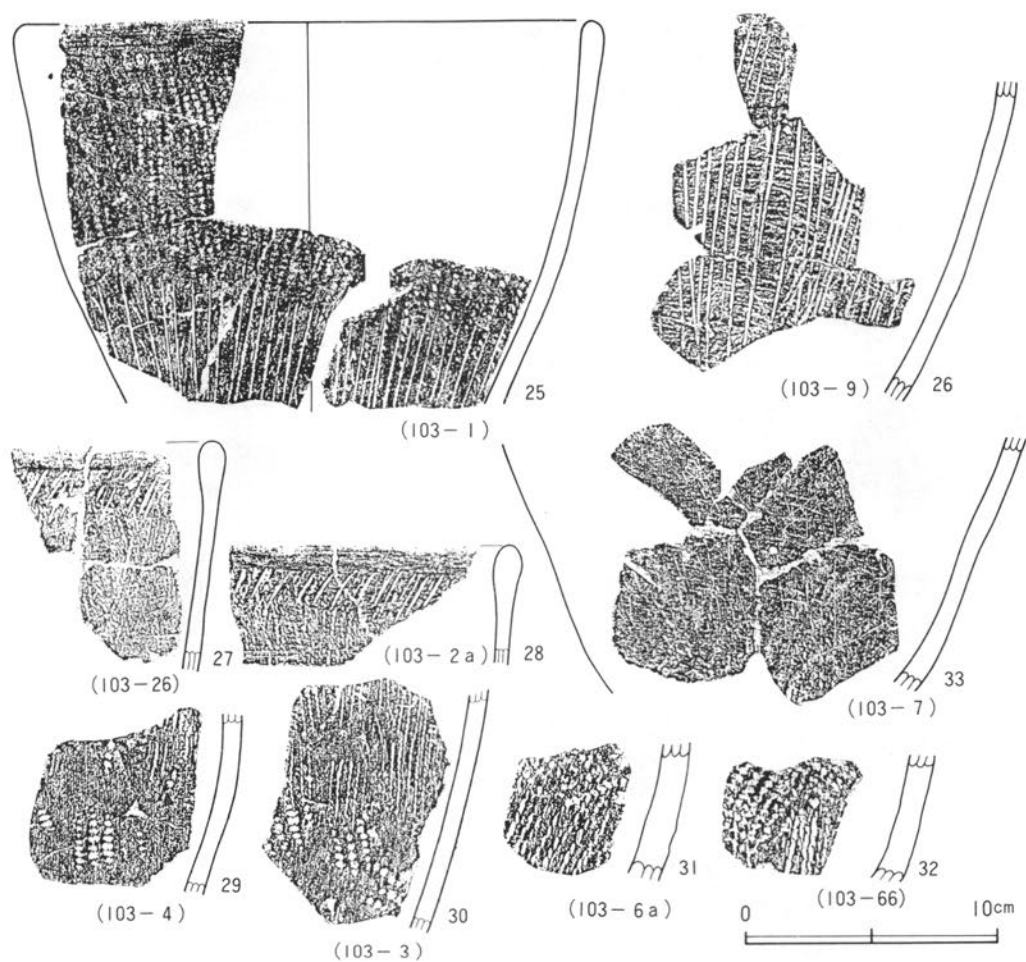


第108図 木の根 I 式 (3 b類 j 型)



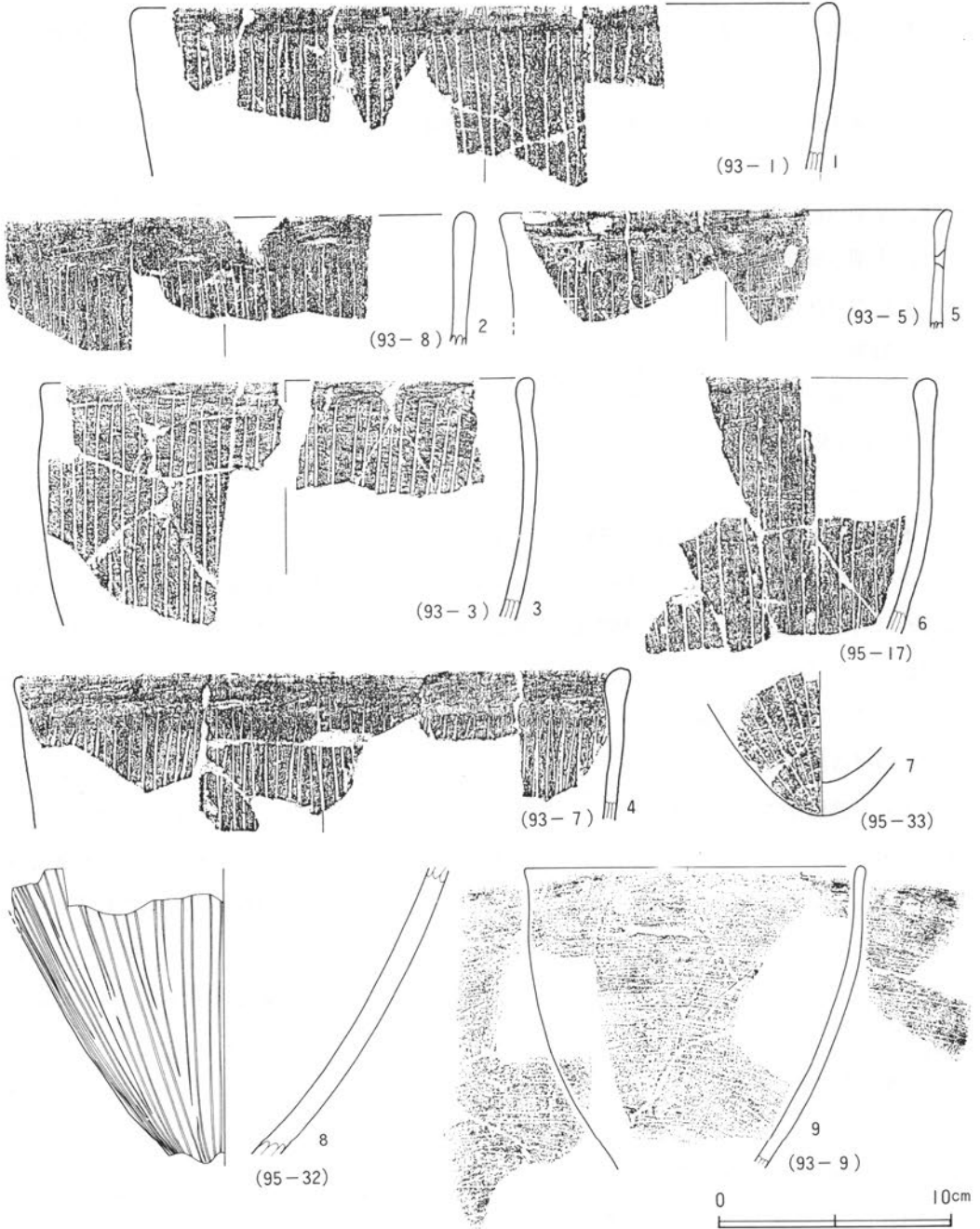
とも関連してのものと考えてもよいであろう。なおかつ本遺跡においては、同時に多様化も開始されたと言いうことができるのである。そして、その多様化の根拠は、本遺跡における沈線をもって施文された一群の土器（C型）の存在をもって提示し得る。ここで言うC型とは報告書中においては5類を特に沈線文系として撚糸文系よりの出自として取り扱ってはいない。しかしながら器形・焼成・胎土ともに3b類と共通の要素をもつものであり、結論的に言うならばこの3b類の確立期にいわば文様の置き換えが行なわれたことが本類成立の要因であると言えよう。すなわち施文が撚糸、縄文から沈線（条線文）に変化してゆく。

第110図におけるC型のうち（1・3）等の土器は3b類期と並行させた場合においてもやや古式的と称してよいかも知れない。あまりはっきりとした無文帯がみられないと言った点から



第109図 木の根I式（3b類j + Y・j + c・Y + c形）

考えられる。資料が限られるため沈線文土器の発生がどの段階からとははっきりと言えないが、多分、口縁部無文帯を持ち始める時期であると考えられることができるだろう。共にすべて縦位の沈線をへら状のもので施している（へら先利用で切り込みはかなり深いものが多い）。しか



第110図 木の根 I 式 (C型)

〔研究ノート〕

し文様構成の基本はY型にあることはあまり説明する必要もあまりない。

ここで3b類土器群にはJ型、Y型、C型の3つのタイプが出現するのである。第109図に示したように体部上半にLR縦走縄文、下半が縦列沈線等と言う組み合わせ(25)の他に撚糸R+沈線(26)、縄文+撚糸等と言うように3者がそれぞれ施され、次々と変化の要素を新しく持ち出しているもの等がみられる。これらが初期段階におけるあり方を見せてくれるものであると思われる。

撚糸文発生期以来積極的に発展して来ている土器群はこの段階で次の4基本型が成立することになる。

1. Y型(撚糸) — Y + J · Y + C
2. J型(縄文) — J + Y · J + C
3. C型(沈線)
4. M型(無文)

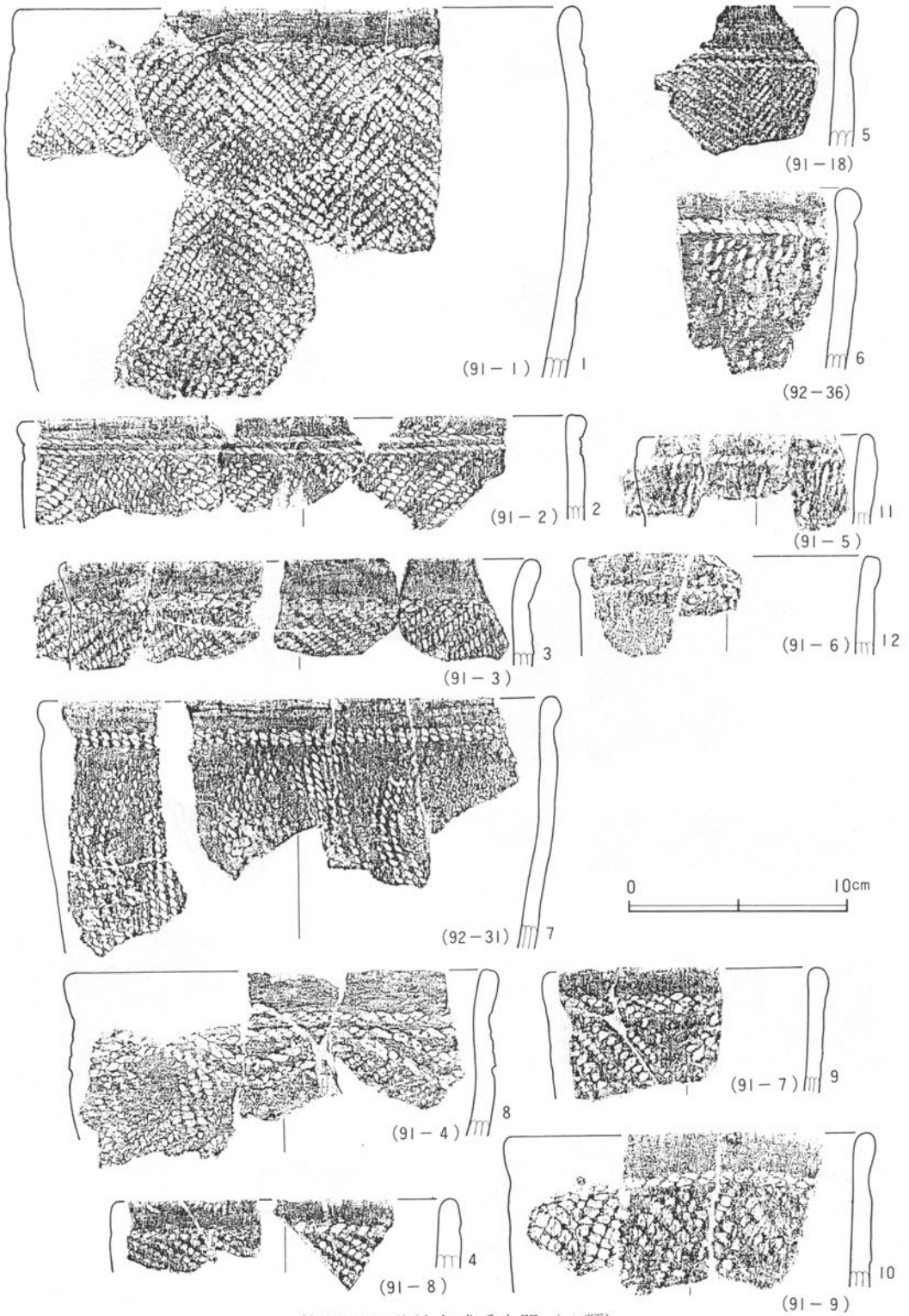
であり、あとは基本的にはこれらを基本文様として組み合わせ発展してゆくものと考えられるのである。(木の根遺跡では、M型は資料的にも少なく、その存在は別に検討を加えたい。)

#### (2)木の根第I群4・5類土器(第111図～113図)

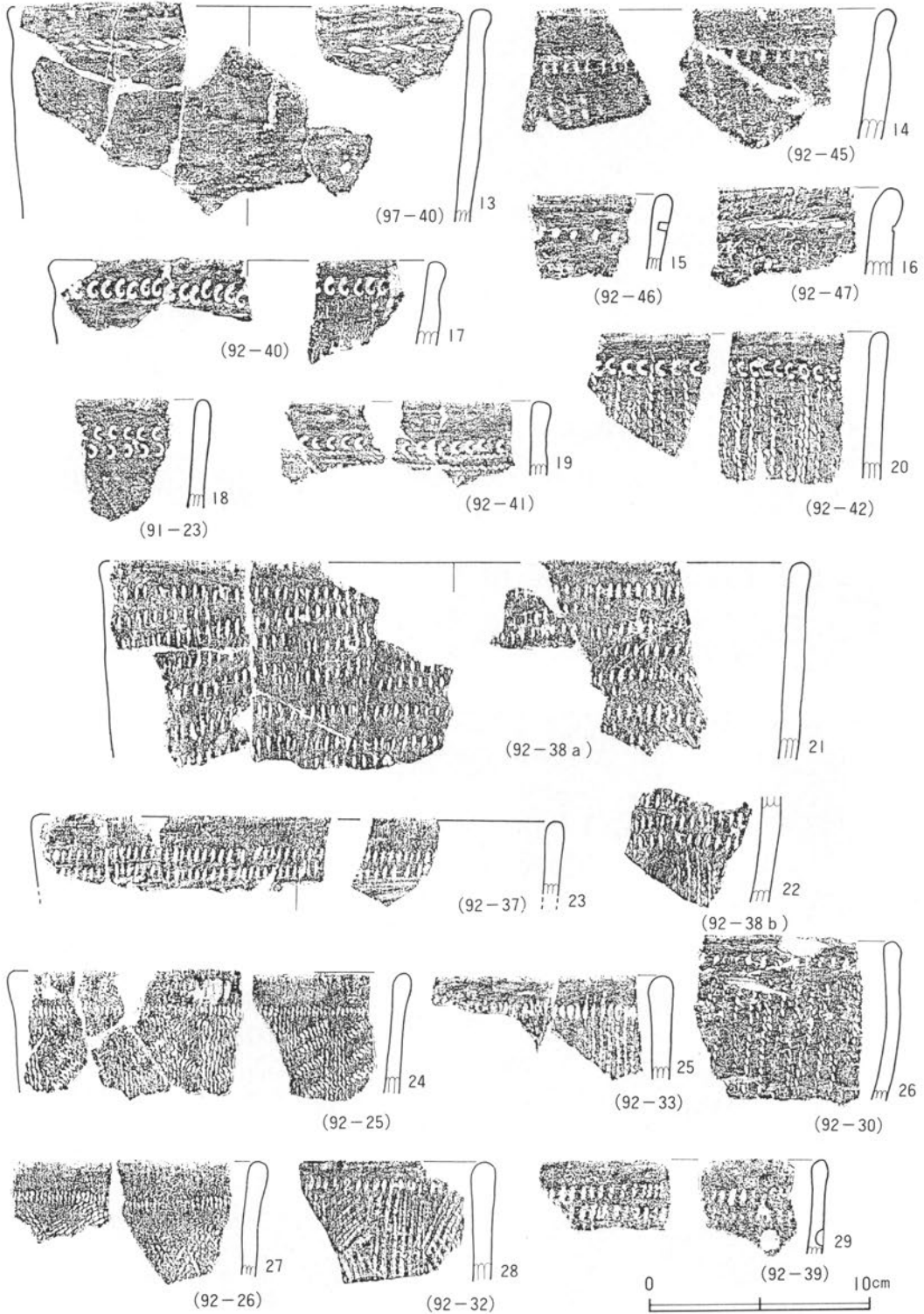
4類土器はいわゆる花輪台式土器である。茨城県利根町一花輪台貝塚は「木の根」からすれば言わば対岸の遺跡であり、夏島期以後、北総(下総)台地において地域化してゆく撚糸文系土器群にあって独自の縄文を地文とする、いわば独自の文化圏を構成し拡大していった土器群と言えよう。いわゆる花輪台式の土器は、それ自身、撚糸文土器を継承した単純な尖底、砲弾形で、口縁は直立ないしはやや外反するもの、文様は口縁部に無文帯を有し、胴部との区画に1～3条の撚紐原体圧痕を施したうえ、胴部には施文方向を変化させることにより生じた羽状縄文(粗い)を特徴とする土器群であり、鈴木氏の検討(「史館10」)によれば極めて複雑な様相を示すものである。従来は有文のものをI式、沈線あるいは全くの無文のものをII式と称して来ているが、本遺跡においては指摘される通り、時間差としてではなく、同一型式内における類型として、理解した方がわかりやすくとらえられるだろう。花輪台式の類型は次の様に示されている。

1. J型、基本型(羽状・縦走・斜行)
2. Y型、Y型各種(組合せ施文)(Y+口縁部加飾)
3. S型、〔刺突型〕(S+J、S+Y)
4. M、C、型(M、C各種、組合せ片口縁部加飾)

以上を基本型+発展型として提示されている。



第III図 花輪台式系土器 (4類)



第112図 花輪台式系土器（5類—金掘式）

本遺跡における花輪台期の土器を以上の分類に対応しつつ検討してみよう。

第111～113図はいわゆる広義の、花輪台式土器である。第111図では、1～3条の原体の押圧以下、羽状縄文及び縦位の縄文を施文しているのである。(第111—11・12)などは口縁部の押圧のみで胴以下は無文化してゆくのかも知れない。(7)及び(8)は注目に値するものである。(4)は羽状とはしていない。縦位施文で「M形」様の連結文様をくり返す、(12)は波型に押圧を施す、地文に縦位の縄文を浅く施している。あまりみかけないバリエーションである。(13—16)は棒状のもので刺突を施したものである。稻荷原式土器に類似するものではないかと思う。時期的に併行するものであり、石神遺跡等においてもその存在が知られている。わずかに断面に見ることができるが、口縁部下の沈線がはっきりとはしないがあることがみれる(註7)これらのうち刺突のものが沈線の代わりとなっているものであろうか。焼成は極めてよくない。(17—20)は半截竹管によるS型である。ほぼ縦位の捺糸が施される。(19)は刺突の下に細い原体が横方向に2条押圧されているのがみえる。石神式に含まれるものと思われる。第113図に示したものは、いわゆる神式土器の特徴的なものである。文様は沈線文を主として、ヘラ状のもので切り込む様にして施文される。2点とも文様のくぎり目とも言うべき所から、捺糸が施される。

(21)以後はY型の変形とみたらよいのであろうか。口縁下に絡条体圧痕+捺糸圧痕を施す。これは胴中位より縦位の捺糸に変化する可能性もある。(21・22・24・27・28)は縦位+斜位の組合せである。(24・27・28)は羽状に対する疑似効果をねらったものであろうか、しかし木の根遺跡ではあまりみることは出来ないが、4類のバリエーションのうちにくまれるものではないかと考えられる。

第114図は5類とされたものである。4類とは基本施文を同一にする沈線文土器である。横位と縦位の沈線の組合せである。(3)も5条、(2)は2条、(4)も2条である。花輪台式土器における口縁部文様帯と胴部文様の区別を意識したものであることは間ちがないと思う。2～3条の縦に入る沈線は間隔がやや密なものと(4)のように間隔が粗くなるものとがみられる。これらの他に(8)のように縦位の沈線を加えているものも見られる。(6)は2条の沈線が山形に施されている。(14・15)は矢羽状に施されている。その他いろいろなパターンに発展し、より複雑なものがみることが出来る。これらは捺糸文系より、前述の過程をふまえて完成された形であると言えよう。焼成は極めて、良好かつ薄手に作られており施文も手の込んだものである。部分的に見るならば次代の土器(第115図)と言うことも出来よう。(18)は口縁部区画の中はせまくなっているが文様構成全体から見れば同一の系統上である。計算された区画と文様であると言えよう。

この第5類の土器の木の根遺跡において3b類以後、文様の変化は、花輪台系の土器の影響

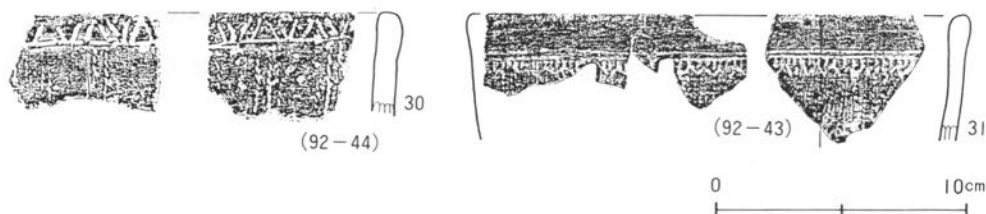
下にありかつ極めて近い存在であることを見ることが出来よう。3 b期においては先に述べたように沈線文が基本旋文としてその位置を確立してゆくことになる時期であると言うならば、すなわち、この5類においては単に燃糸文からの文様の置換がよりおし進められるだけでなく花輪台式土器の影響下において、これらの沈線を用いる土器群が完成されてゆく時期であったと考えられる。口縁部における横位の沈線により文様帯の区画をなすこと、これは花輪台式の土器の影響ないしは、同時存在があつて初めて成り立つ、変化であると言えよう。山形及び格子状のものは、縦及び横方向に施文すると言うことの組合せからの単純な変化とも思われるが、矢羽根の沈線はまず間違いなく花輪台式土器による羽状縄文の疑似効果と称してもよいと思う。

5類の文様の多様化はこの外部からの影響及びそれらの重層的な様相による変化であると言える。

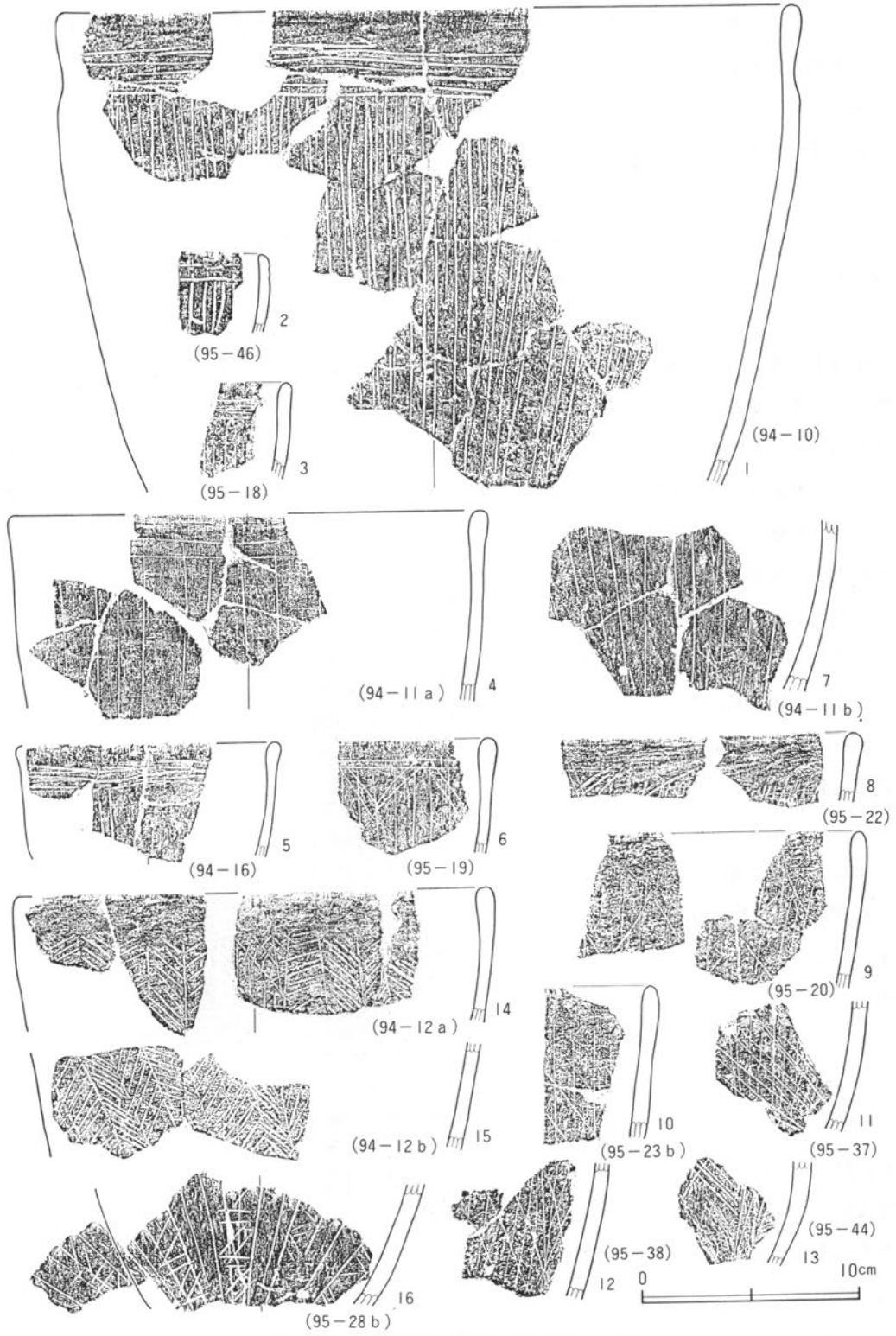
#### 4. 木の根 I 式及びII式土器の時間的展開

すでに述べた通り、木の根No.6遺跡において、出土する土器の連続性については、明らかたところである。第118図に示したものは、木の根遺跡出土の縄文時代早期燃糸文系土器群を3種の基本型に分け、その発展型を示してみたものである。基本型は最上段に示すY型、J型、C型である。Y型は縦位の施文が主流である。J型は縦及び斜方向の施文が主流であろう。C型はY及びJ型からの文様置換と言う考え方からすれば、縦、斜、がその基本要素になってゆくことは間違いない。3 b類がこの時期にあつたと考えられる。口縁は従来形状を引きつぎ、円頭状を主とし内側にも肥厚するものがみられる。最大の変化とも言うべきものは口縁調整にとどまった3 a類に対し、口縁部の無文化が確かなものとして定着してゆくことであろう。(口唇部及び口縁部における施文の変化については第116図にその時間的変化を編年的な位置と対比させて、まとめてみた。)

本類の要素たる口縁部無文帯の存在は花輪台式以外においては、稻荷原式等においてもみることができ、また三浦半島に分布する大浦山式の口縁部無文帯の形成に影響を与えるとされているものであるが、大浦山式の特徴として存在する「横走る燃糸文」が本類の燃糸文及び沈



第113図 花輪台式系土器 (5類-石神式)



第114図 木の根Ⅱ式土器(前期タイプ)



〔研究ノート〕

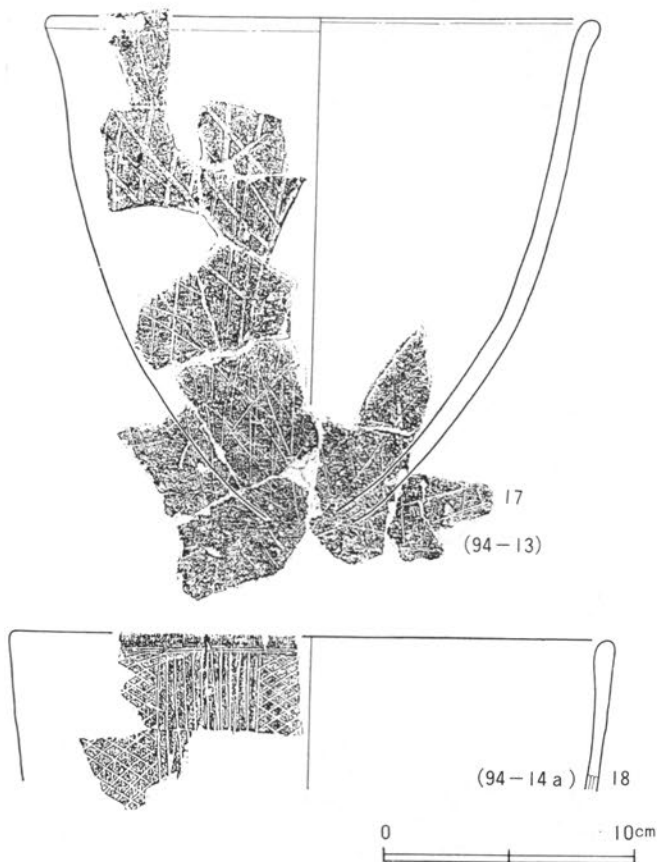
線文における「横走」と相互関係があるものとするならば、口縁部無文化は、稻荷台期に入ると関東地方において同時期的かつ共通して起きた変化であると言えることが出来よう。(横走するものについて図示しているのは無文帯の形成が単に地域的な様相ではなく南関東一般で展開された変化—大浦山式における—が影響しているのではないかという点からであり量的な点についてはさほどではない。)

もうひとつの大きな変化は3 a類において縄文対捺糸の比率が7対3であったものが3 b類期においては3対7とその比率が逆転する。撚りの方向はYではR、Jは単節LRが主となっている。

組成上の変化は、縄文、捺糸文の2種類の基本的組成に沈線文が加わることである。施文は捺糸文に準じ縦位、斜位、横位(少数?)がみられる。これらはまったくの新発見とも言うべきものであり、捺糸文、縄文といった旧来の組成に新たな要素が加わったということ。これは旧来の捺糸文系土器群の存在を大きく変化させてゆく要因であり、本類以前の捺糸文系土器群のより発展した段階と考えることが必要であると思われる。木の根出土土器で言うならば3 b類期の土器群と併行関係にあり縦位及び斜位の「沈線」を主文様として施す一群の土器をもって木の根I式土器と称したい。

また本遺跡と同時期ないしは後続する時期においては、縄文、捺糸文それに無文と言うものが主たる組合せとして知られている。

稻荷台〔J+Y〕—稻荷原〔J+Y+無文〕と言う組み合わせが編年研究上の一つのメルクマールとしてきているが、木の根遺跡におけるこの時期の無文土器の比率は極めて低いものとなっており、(有文8—無文2) 稻荷原系の存在—影響は極めて少ないものではないかと考えられる。(註8) 従来は(縄文+捺糸文)+(無文)→沈線文という流れが示されてきたが本遺跡



第115図 木の根II式土器(後期タイプ)

においては無文化ではなく、沈線文が組成に組み込まれることにより、沈線文を主とする構成が主力となり無文土器の存在比率が高まることになかったとも推察し得るだろう。(註9)

この変化は次の段階で、花輪台式土器の影響化においてより多様性を示します。Y型では縦位の沈線との組合せ、あるいは縦位及び斜位の組合せなどが発展型として展開し出す。木の根遺跡で見られるパターンは第118図に示した通りで、J型は基本的には花輪台式土器にとり込まれてしまったかの様な感じがある。そして文様の組合せと言う点からも、撚糸文との組合せをみることは出来るが、Y型及びC型共に、ほとんど縄文との組合せがなくなることも特色としてあげられる。木の根No.6遺跡においては、この時期に撚糸文も縄文も共にその基本的施文が沈線文に置きかえられてしまった、と考えることも出来る。(註10)

これらの中でC型は極めて多種の類型へと展開してゆく。例えば口縁部無文帯下に2～3条の横走の沈線を施し以下縦位の沈線による施文等はまさに、花輪台式土器の模倣としか言いようはないだろう。これらの特色として、口縁部下における横位の沈線、すなわち口縁部と胴部文様帯を意識的に区画する施文方法である。単なる沈線によるものだけでなく、半截竹管文によるもの、あるいは撚糸圧痕によるもの等その意図するところは、共通であると言えよう。この2～3条の沈線をはじめとする押圧原体施文は花輪台式土器本来のものに対する押圧原体施文と単位的にも対応することから、ある程度、規制があったのではないかと考えられる。本類はその施文の基本型等から考えるならば、花輪台式期の所産ではあるが、また撚糸文系土器の、沈線文への発展段階における過程でもあるため木の根I式に対応する木の根II式と称してもよいだろう。この沈線文系土器以外のバリエーションについては鈴木氏及び宮崎氏の論考に述べられている。

木の根II式の早い段階においては、文様の置換及び撚糸文系にみられる要素との組合せが主であったものと思われるが、より発展段階にあるもの一すなわち、口縁部区画が単に無文であるだけでなく、より積極的に施文する段階、口縁部文様帯に発展してゆく一群がみられる。第114図に示したものであるがより積極的に発展することにより、三戸式と極めて近似する細沈線文を生み出してゆくものであると考えられる。そして各地においては極めて分化した形のを多少見ることが出来る。石神あるいは金掘式と呼ばれるこの時期の土器は、その分布がいくらか広く知られており類例をみることも出来る。(註11)石神式等はC型の発展型後期に位置し得るかも知れない。(第113図)口縁部区画をもうけ加飾を加えるといった点においては花輪台式系の延長上に位置し多少その分布圏を異にしながらも施文のパターン等は木の根II式とも極めて近い関係にあるものと考えられよう。しかしながら木の根系以外の沈線文土器は内容的には撚糸文の規制を維持しつつもその存在は次代へ受けつがれてゆくことはなかったと言えることが出来よう。

5. ま と め

本論は木の根遺跡出土の捺糸文系土器群の見直しを行ない、再検討を加えてきたものである。捺糸文系土器に対応しつつ、発生したと考えられる沈線文土器の初期型式の存在を改めて提示するとともにその時間的位置を呈示することを目的として論を進めてみた。木の根遺跡を最大の根拠とする極めて限られた資料であることなどから、その存在を確たるものとする事が出来たか、いささか不安が残る。しかしながら捺糸文系土器が沈線文系土器へと向って展開する初期沈線文土器群のなかで木の根3b類に対応する沈線文土器を「木の根I式」とし、また木の根I式の直接の発展型式（花輪台式土器の影響下に成立した土器群）を「木の根II式」として提唱してゆきたい。この木の根II式は大きく捉えれば花輪台式に含むことも可能であるとも考えられるが、これらの発展型が次代へ継承されるならば、ここでは主体として呼ぶべきではないかと思う。

様式	編年	出土遺跡	木の根分類	胴部(主要)文様変化	日縁部変化
	三戸	No. 7 No. 67			口縁部形特徴化 (内ソギ)
	(+)	(+) [竹之内]	(+)	(?)	口唇部加飾 (キザミ)
V	花輪台式系 [金掘石神]	No. 6 No. 7	5・4類	縄文花輪台式系 捺糸文 沈線文(無文)	口縁部加飾 (口縁部胴部文様区画化?) 口縁部無文帯確立 口縁部文様形成
	(稻荷原)	No. 6 No. 7	3類(b)	捺糸文	口縁部整形 (無文帯形成)
IV	木の根I				(無文化)
	稻荷台	No. 6 No. 7	3類(a)		口唇部調整 (内外面にいたる)
		No. 13			
III	夏島	No. 2 No. 18 No. 3 No. 19 No. 6 No. 60 No. 7 No. 62 No. 10 No. 68	2類 口唇部文様欠落	縄文 捺糸文	口唇部調整 (研磨) 口唇部文様欠落
II・I	井草 II・I	No. 2 No. 19 No. 6 No. 60 No. 7 No. 62 No. 10	1類		口唇部施文 (絶文押圧)

第116図 木の根系土器群を軸とする土器の変遷

現在この木の根Ⅰ～Ⅱ式土器を出土する遺跡は「木の根No.6遺跡」と「No.7遺跡」とをあげると他に2項でも述べたとおり、その周辺においてはみることが出来ないのである。

最近、福島県竹之内遺跡において「木の根式土器」の存在が報告されて、一気にその「分布」が東北地方南部にまで広がった。基本的な文様構成等から「木の根式」として考えることの出来る内容を有している。口縁下横位沈線により口縁部区画がなされる点等から考えて、「木の根Ⅱ式」期に相当するものと言えよう。その分布が広がったと言ってもまだその出土地が3遺跡にすぎないため、「地域差」等と称してよいかかわからないがその器形は、口縁は直立気味で胴部がゆったりとふくらみ、「北総の木の根Ⅱ式」に比べ口縁部の外返が強く、胴が細身でもあるといった、違いがみられる。

この東北地方南部における木の根系土器と竹之内式土器における変化がどの様に北総(関東)方面と関連を持ち展開するのだろうか。そこで分布及び相互の関連に関して位置的にもきわめて興味をそえられる資料の存在を提示しておきたい。(第117図)

それは両遺跡のほぼ中間点とも言える茨城県水戸市十万原遺跡の表採資料である。那珂川の支流にはさまれた、標高約40mの舌状台地に位置する。(註12)

(1)は木の根系(?)になるのではないかと考えられる沈線文土器である。口縁断面形をみると三戸式とも考えられる。(2・6)は平行沈線下に格子目状に入るものである。4は平行沈線と斜行する沈線との組み合わせである。報告者は蛇王堂Ⅱとしている。(3)は、竹之内遺跡において「木の根系土器」より新しいとされた一群に類似するものである。(報告書第46図参照されたい。)平行沈線と格子目状沈線の組み合わせである。(5)は木の根・竹之内、いずれともつかぬが文様構成上は同一の系統にあるものと考えられる。

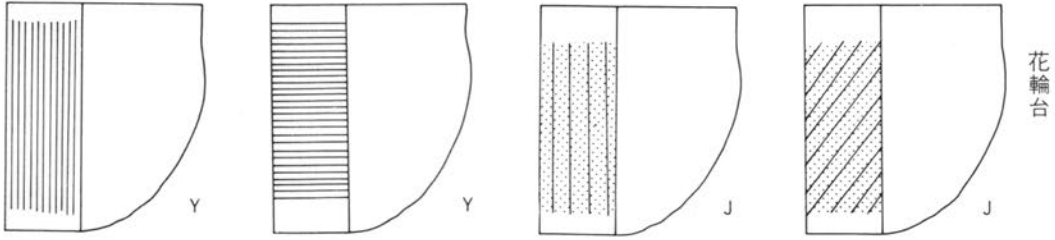
(1)は、やや疑問のあるものだが残りは文様的にも東北の様相を有する沈線文系初頭の土器群に類似するものと考えられ、那珂川周辺を中心として資料の再点検が必要である。水戸市周辺まで竹之内系の影響が入り込むとするならば前段階に位置する木の根系土器群の展開はどの様になっていったのだろうか。撚糸文最終末期～沈線文期への転換の時



第117図

水戸市十万原遺跡出土沈線市系土器 (1/3)

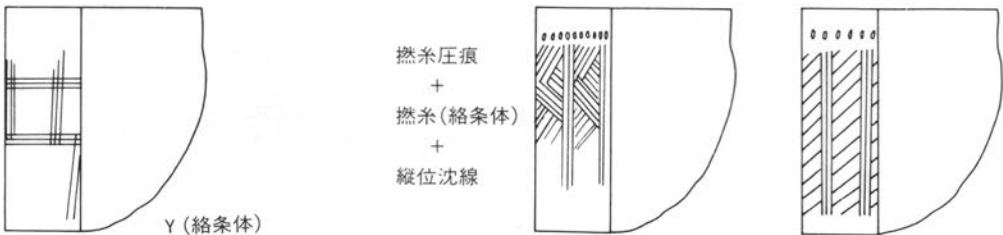
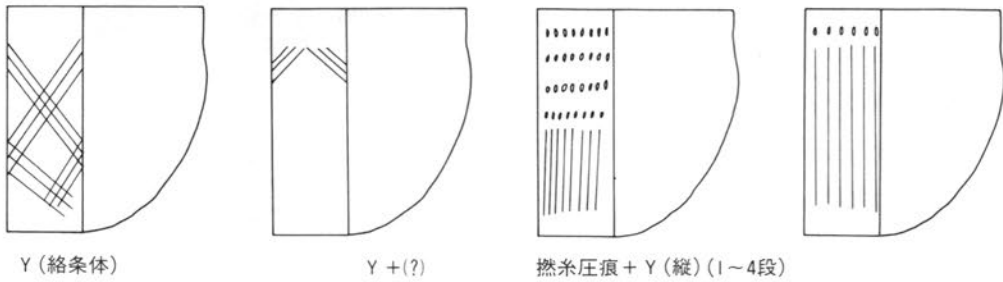
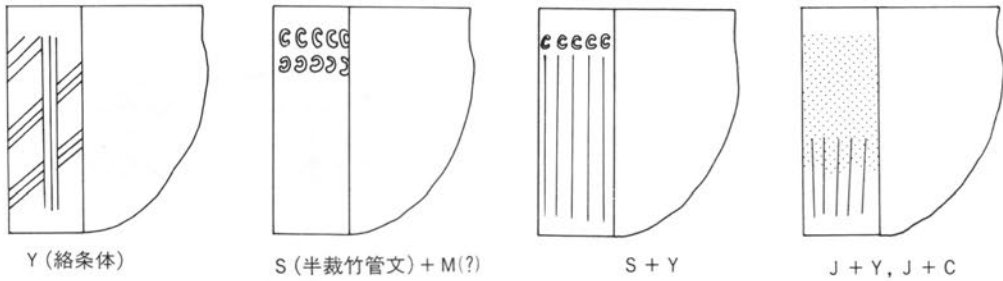
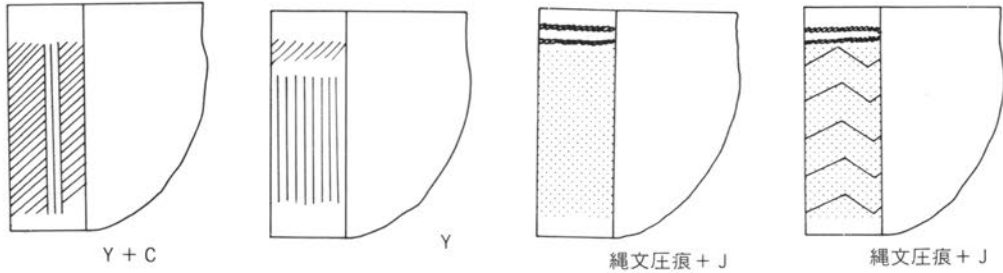
[研究ノート]



花輪台

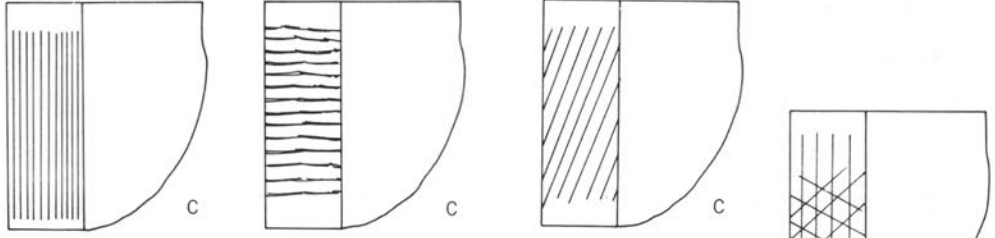
燃糸文-(縦)口縁部無文帯 (横)口縁部無文帯

縄文-(縦・横・斜・異方向) 口縁部無文帯



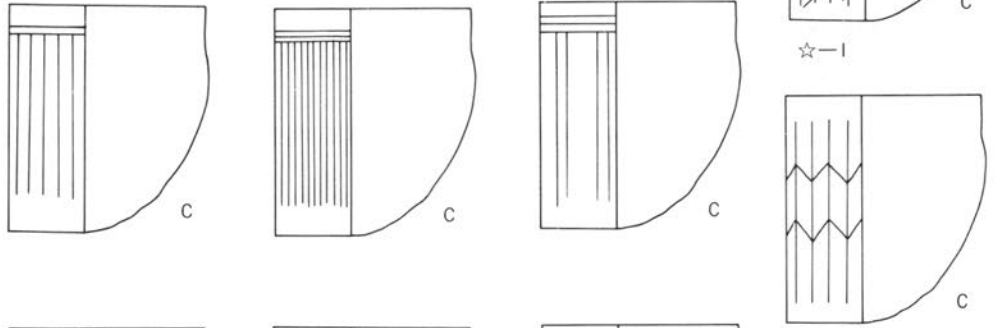
第118図 木の根系沈線文土器群基本類型集成図

木の根 (I) 基本型

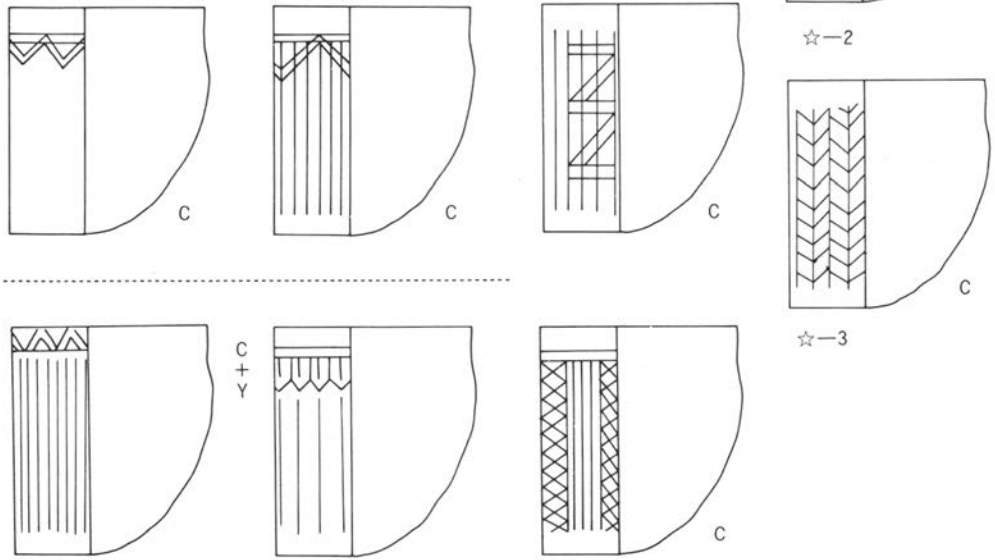


沈線文 - (縦・斜・横) 口縁部無文帯

木の根 (II)



(石神)



沈線文系は縦位施文を基本とする。

格子目状沈線文

☆-1~3 木の根(1)の縦位及び斜位沈線の組み合わせより  
 ☆-1の存在を想定し得る。☆-2~3は、  
 ☆-1の流れと、花輪台系の羽状縄文の置き  
 かえと言う点からの要素という文様発展が考  
 えられる。

Y = 燃系文  
 J = 縄文  
 C = 沈線文  
 S = 刺突文  
 M = 無文

〔研究ノート〕

間的差異がさほどあるものとは考えられない。これらを加味しながら木の根系土器を中心とした資料の収集を行なってゆきたいと思う。

本論を終えるにあたり、木の根系土器の時間的位置が思わぬ資料の出現により確認することが出来、その内容が極めて多様化しつつ広範囲に分布することが推察出来るに至った。より以上の資料と類例の増加を待ちつつ、これらの問題の究明をしてゆきたいと思う。(註13)

本論を書くにあたり数多くの人々より、御教示、御指導いただいた。特に、斎木、西川、原田氏には、資料等について多大な援助をうけた。本稿の呈示をもってお礼にかえさせていただきたい。(昭和58年3月31日脱稿)

- 註1 報告書名の「木の根」は空港完成後失なわれるであろう「字名」を残してゆこうとする考え方から付せられたものであり遺跡名としては「木の根No.5遺跡」と「木の根No.6遺跡」の2遺跡を含んだ内容である。いま「木の根」と呼ばれているものは「No.6遺跡」のことである。現在「木の根」が広く用いられていることが多いため、今後「木の根No.6遺跡」のことをもっぱら呼ぶこととする。
- 註2 撚糸文期以前については現在までのところ、その存在を知ることが出来ない。それとは逆に田戸期以後、茅山期にいたると遺跡数の増大は著しく、「どこにでもある」と言っても過言ではない。現、利根川岸における早期貝塚群の他に大栄町、多古町、佐原市の境を流れる大須賀川、栗山川水系において一種の段丘状になった台地先端部において撚糸文～沈線文期の遺跡が数多くみられる。空港建設により地域的に様相が明らかにされた三里塚遺跡群が今後どの様に展開してゆくのかを考える上にかかせない地域である。
- 註3 岡本孝之「稲荷台文化の展開」1972、全関東的に同一時期に限り分布と展開を分析している、数少ない論文。稲荷台式土器は利根川流域系が少数、江戸川流域が主と分析、その差を花輪台、稲荷原の展開の差としている（原1966、岡本1972、鈴木定1978）
- 註4 この時期、土器のみならず、社会内容にも大きな変化—発展が生じた可能性がある。報告書において「3類」に比定し得る土偶の検出があげられよう。（3類期のものとなれば最古の土偶と言えるものである。）すなわち土偶そして土製円盤の発生が、同時におこなわれていることは、土器文様の多様化と同時に大きな変化が集団内に発生したものと考えられよう。これが稲荷台期からの分布的展開と対応する内的変化とも考えることも可能だろう。（なお土製円盤は夏島期にまで遡る可能性もある。）
- 註5 3a類を稲荷台（古）期、3b類を稲荷台（新）期にも対比し得る。またこれらの発展過程は宮崎及び可児氏の三段階に対応するか。（宮崎1981、可児1976）
- 註6 下総台地ではいわゆるIII・IV様式（小林）は縄文優位とされているが千葉ニュータウン内榎峠で4：1の圧倒的優位に対し、数kmしか離れていない七軒屋遺跡では、その70%が撚糸文である等、現在では単純に言い切れないものがある。この比率は異なる遺跡間の集団分化と言う問題も提示し得る可能性があるのではないだろうか。
- 註7 いわゆる撚糸文期における「手ぬぎの方向」である。最上の「手ぬぎ」は無文化であろう。木の根No.6遺跡において、単なる無文化は、受け入れられなかった。そのかわりに沈線文化があったがために無文化は一部を占めるにすぎない存在でしかなかったのかも知れない。
- 註8 市川市二ツ木向台遺跡において、外反する口縁を有する土器に山形の撚糸組合せがみられる。これなどは口縁を外反させることにより沈線状のものを形成したと解することも出来るだろう。
- 註9 無文土器については本遺跡に関する限り、無文化ではなく、沈線化することにより、その存在の比率が低い、とも考えられる。利根川岸及び江戸川以西に対し印旛沼から北総台地—成田市周辺にかけての地域分化が存在するのではないだろうか。（木の根No.6～No.7、佐倉市生谷境掘、金掘遺跡等の資料から、考えられる。）
- 註10 この沈線文の加飾についても木の根I～II式では、多少変化が見られる。「I」ではかなり深く切り込まれていることから、器面のあまりかわかないうちに施文されるものが多く、「II」では器面を磨きあげた上で、器面がかわいた状態で加飾されたものであろうか浅めの沈線が多い。
- 註11 市川二ツ木出土の鋸歯状沈線文（石神あるいは栗原式と呼ばれたもの）等があげられよう。これらの出現は他地域においては、撚糸文期における地域圏分化における小集団内発



展によるものではないかと考えられる。絡条体圧痕文系は、やはり石神、生谷境掘等においても、様相が多様に分布するのが知られている。

註12 論文自体は三戸式及び田戸下層式の種類について述べられている。「三戸式の文様表徴は田戸下層式の一部であって、ことさらに独立した要素を認めないということである。」と言う極めて理解し難い結論を提示している。

註13 本論脱稿後、整理作業中の香取郡多古町「多古工業団地内土持台遺跡」出土の撚糸文系土器群中に「木の根Ⅰ」式土器が存在することがわかった。口唇直下より施文されるものもあり、古さと言う点からも注目される。木の根遺跡の南東約6kmに位置し、木の根遺跡と同じ栗山川水系に面する台地上である。

#### 参考文献

- 赤星 直忠 1936 「古式土器の一形式としての三戸式土器に就いて」 『考古学』 7—9
- 安孫子昭二 1967 『多摩ニュータウン遺跡調査報告』 IV多摩ニュータウン遺跡調査会
- 安孫子昭二 可児 通宏 1967 『多摩ニュータウンV』 「No99遺跡」
- 安孫子昭二 1982 子母口式土器の再検討—清水柳遺跡第二群土器の検討を中心として—東京考古（東京考古談話会）
- 池田 大助 1978 「佐原市神田台遺跡」 千葉県教育委員会
- 池田 大助 宮 重行 野口 行雄 1981 「木の根」 千葉県文化財センター
- 石井 則孝 1974 「木更津市笹子込山遺跡の研究」 史館
- 石田 広美 1980 「君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 茨城高校史学部 1972 「水戸市十万原遺跡発見の縄文早期沈線文系土器」 『常総台地6』
- 岡本 勇 1960 「三浦市大浦山遺跡」 横須賀市博物館研究報告4
- 岡本 勇 1971 「神奈川県三浦市三戸遺跡」 日本考古学年報19
- 岡本 勇 1982 『縄文土器大成Ⅰ、早期・前期』 講談社
- 岡本 孝之 1972 稲荷木台文化の展開（1・2）古代文化24—1～2
- 小野 真一 1979 『常陸伏見』 伏見遺跡調査会・鹿島考古学資料刊行会
- 柿沼修平他 1980 「清水台No.1遺跡発掘調査報告」 清水台No.1遺跡調査会
- 小林 達雄 1966 「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ」
- 斎木 勝 1973 「東京湾東岸における縄文草創期、早期遺跡群」 『ふさ4号』 ふさの会
- 斉藤 弘道 宮内 良隆 1976 「茨城県における縄文草創期撚糸系土器群の検討」 『常総台地8』
- 篠原 正 1979 「北総台地における縄文時代草創期後半について」 『千葉県の歴史17』
- 白崎 高保 1941 「東京稲荷台先史遺跡」 『古代文化』 20—8
- 周東 隆一 1961 「撚糸文文化の研究」 『考古学研究28』
- 庄司 克 堀越 正行 1974 「松戸市二ツ木向台遺跡における早期縄文式土器の研究」 『史館』 3
- 杉原 荘介 芹沢長介 1957 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」 1967 『明治大学文学部研究報告』 2
- 鈴木道之助 1977 「東寺山石神遺跡の撚糸文土器について」 『東寺山石神遺跡』 千葉県文化財センター
- 鈴木道之助 1975 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」 千葉県都市公社
- 鈴木道之助 1976 「下総台地における縄文時代初頭の文化」 『史館』 4
- 鈴木道之助 1978 「花輪台式土器とその終末」 『史館』 10

- 芹沢 長介 1967 「神奈川県大丸遺跡の研究」 『駿台史学』 7  
中山 吉秀 1975 「清水谷遺跡」  
中山 吉秀 1976 「千葉ニュータウンV」 千葉県都市公社  
中山 吉秀 1976 「千葉ニュータウンIV」 千葉県都市公社  
成田 市史 1980 「原始古代編」 成田市市史編さん室  
西村 正衛 金子 浩昌 芹沢 長介 1955 「千葉県西の城貝塚」 『石器時代』 2  
西村 正衛 金子 浩昌 1960 「千葉県香取郡鶴崎貝塚」 『古代』 35  
原 昌幸 1966 「撚糸文文化の展開に関する試論」 『金鈴19』  
原田 信行 1983 「藤の台」  
古内 茂他 1982 「千葉ニュータウンVI」 千葉県文化財センター  
三友国五郎 安岡 路洋 1966 「稲荷原」 大宮市教育委員会  
宮崎 朝雄 1973 「坂東坂」 埼玉県遺跡発掘調査報告 2  
宮崎 朝雄 1981 「撚糸文系土器群の終末と無文土器群」 『土曜考古』 3  
宮崎 朝雄 1982 「撚糸文土器」 『縄文文化の研究II』  
いわき市教育文化事業団 1982 「竹之内遺跡」 福島県いわき市教育委員会  
吉田 格 1948 「茨城県花輪台貝塚概報」 『日本考古学』 1-1  
吉田 格 1955 「千葉京城ノ台貝塚」 『石器時代』 1